

平成27年3月

一般社団法人全国日本語学校連合会  
日本人の文化と精神の研究第 25 回

## 第 25 回 日本人の宗教観と死生観～ I S I L 人質事件の違和感の一つの解法～

### 1 イスラム教とは？

今年平成27年、1月になって、非常に大きな事件がありました。以前から話題になっていた I S I L、これまでは「イスラム国」というように自称していたテロ集団において、日本人が人質になり、身代金を要求された上に、その交渉が破綻して人質が殺されてしまうという事件です。

まずこの場をお借りして、人質となって命を落としたお二人の方のご冥福をお祈りいたします。

さて、ここではこの事件に関してさまざまに論評することはしません。問題は、「どうしてこのようになってしまったか」ということを、イスラム教と、日本のほとんどの方の持つ宗教観や死生観との違いを見ながら、一つの方向を考えてみたいと思います。

その前に、まず、イスラム教とはどのような宗教でしょうか。

イスラム教は、唯一絶対の神（アラビア語でアッラーフ）を信仰し、神が最後の預言者たるムハンマドを通じて人々に伝えたとされるコーランの教えを信じ、従う一神教です。

そもそもイスラームという言葉は「唯一のアッラーの神への絶対的帰依」を意味する言葉とされています。これは、アラビア語で平和を意味する「サラーム (salaam)」という言葉と同じ起源の言葉であるとされていまして、「アッラーの神の下での平和」ということを表現しているとされています。そして、この「サラーム」は、アラビア語のあいさつの中にも使われる言葉になっているのです。

イスラム教はもともとユダヤ教やキリスト教の流れをくむもので、キリスト教が古く、キリストという神の啓示者の言葉を聖書にしていたのに対して、イスラムでは、キリストよりも後の世にムハンマドという預言者によって神の言葉を伝えさせたことに由来するとされています。

西暦 600 年ごろ、当時商業を営んでいたムハンマドが、40 歳頃、メッカ近郊の山中にてアラビア語で神から啓示を授かり、その神の啓示を多くの人に伝えることから始まります。

さて、イスラム教の教義に関しては、私も専門ではありませんし、また、間違えたことを

書くと宗教に失礼ですので、宗教法人日本ムスリム協会のホームページから、そのまま抜粋します。(http://jmaweb.net/free/aboutislam)

<以下抜粋>

## イスラームの根本教義

イスラームは「アッラーの他に神はなし」と「ムハンマドはアッラーの使徒なり」の2命題をもって信仰告白句とするのを通例としている。

一方スンナ派は、(1)神、(2)天使、(3)啓典、(4)使徒、(5)来世、(6)予定、の6項を信仰の6柱、他方シーア派は(1)神の唯一性、(2)神の正義、(3)預言、(4)教主職、(5)来世、の5項を信仰の5柱とする。それ故ここでは、イスラームの根本教義として、信仰告白句に述べられた(1)神、(2)使徒、に、スンナ派とシーア派に共通する信仰の柱、即ち(3)来世、を加えた(1)神、(2)使徒、(3)来世、の3つの概念について簡潔に纏めてみたい。

## アッラー

木石、動物、天体は言うに及ばず、いかなる人間、天使、悪魔であれ、時空の中に存在する限り、それは有限であり、有限な存在は全て被造物であるに過ぎない。宇宙は時空を超えた存在によって無から創造された。この時空を超えた宇宙の創造者がイスラームで言う「神」、アッラーである。アッラーは時空の創造者であって、時空によって拘束されることはない。宇宙であれ、異次元であれ、いかなる場所にもアッラーは存在しない。神は何処にも存在しない。時空を超越した神の存在は、そもそも「何処に」と答えられるようなものではない。時空を超越し姿形を有さないにもかかわらず、神は人間とコミュニケーションを行う人格神である。空間の中に位置する身体ではなく、心が神と人間のコミュニケーションの場であり、言語がその媒体となる。人格神である、とは、神が人間に語りかける神であることを意味する。そして人間に語りかける人格神アッラーは、言葉をもって人間に善を命じ、悪を禁じ、法を定める立法者でもある。創造主にして、立法者。アッラーは宇宙の存在の根源であると共に、人間の法/道徳規範の源泉でもある。

イスラームの根本教義とは、アッラーが、万物の唯一の創造主であり、彼のみが森羅万象を司っており、何物もその意志なくしては一瞬たりとも存在し得ないことを悟り、その命(めい)のみに服従し、唯神のみに崇拜を捧げ尽くすことに他ならない。そしてそれこそがイスラームの信仰告白句「ラーイラーハイッラッラー(アッラーの他に神はなし)」の意味なのである。

## 教えの真髄

一神教とは？

神を信仰対象とする宗教は、一神教と多神教に分けることができます。一神教は一つの神だけを崇拜し、他の何物も(偶像、人間、太陽、星、木、石、動物など)崇拜しない教です。世界的宗教の中で、代表的な一神教は、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教です。イスラーム教では、神のことをアラビア語でアッラーといいます。アッラーが唯一神であることは、イスラーム教の聖典である「クルアーン」の中で何度も述べられています。

たとえば、「汝らの神は唯一なる神」(22章34節)、「並ぶものなき神」(42章11節)、「言え、かれはアッラー、唯一者であられる。アッラーは、自存者であられ、かれは産みたまわず、また産まれたまわぬ、かれに比べ得る、何ものもない。」(112章1～4節)などです。

神の唯一性のことをアラビア語でタウヒードといい、イスラーム教において一番重要な教義となっています。

六信五行とは？

宗教としてのイスラームの信仰と教義は、二つの基本から成り立っています。一つは、「アルカーン・イーマーン」と称する六つの信仰箇条であり、他の一つは、「アルカーン・イスラーム (イバーダート)」と呼ばれる、五つの宗教的義務であります。これをイスラームの「六信・五行」と称し、すべてのイスラーム信徒に課せられています。

- 六信 -

「六信」の信仰箇条とは、以下の通りです。1) アッラーを信ずること、2) アッラーの諸天使を信ずること、3) アッラーの諸啓典を信ずること、4) アッラーの諸預言者を信ずること、5) 来世を信ずること、6) 天命を信ずること。

- 解説 -

1) アッラーを信ずること

アッラーとは、アラビア語の「イラーフ」(神)に定冠詞「アル」をつけてできた言葉で、唯一絶対神(宇宙の創造主であり全知・全能者)を表わします。

2) アッラーの諸天使を信ずること

天使は、光からつくられ、アッラーに仕える霊的存在で、多数あるが特に主要なものとして、四天使があげられる。

1. ジブリール (ガブリエル) : ムハンマドにアッラーの啓示を伝達した。

2. ミーカーイール (ミカエル) : 海、湖、河川等すべての水にかかわる領域の守護者。

3. イスラフイーール : 空気の守護者で復活の時にラッパを吹くとされている。

4. イズライル：死の天使で、人間が死んだとき魂を身体から取り出す。

### 3) アッラーの諸啓典を信ずること

啓典とは、アッラーが天使ジブリールを通して人間に示された啓示で、複数あります。中でも特に神聖視されているのが最高啓典である「クルアーン」、次いでムーサー（モーゼ）に与えられた「トーラー」（＝五書。『旧約聖書』の「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」）、イエスに与えられた『福音書』（『新約聖書』の「マタイ」「マルコ」「ルカ」「ヨハネ」の四福音書）、ダーウッド（ダビデ）に与えられた「詩編」です。

### 4) アッラーの諸預言者を信ずること

どの民族にも最低一人は預言者が送られたといわれています。「クルアーン」には 27 人の予言者の名がありますが、特に重要なのは、アーダム（アダム）、ヌーフ（ノア）、イブラヒーム（アブラハム）、ムーサー（モーゼ）、イーサー（イエス）、そして最後の預言者であるムハンマド（SAW）です。

### 5) 来世を信ずること

イスラームの来世は、仏教で言うところの生まれかわっていく来世ではなく、最後の日がきて、死者がよみがえり、最後の審判を受けた後に行く天国または地獄のことです。

### 6) 天命を信ずること

天命とは、「あらゆる宇宙万象は、アッラーの意志によるものである」というものですが、人間には善悪を選択する自由意志を与えられております。したがって、自分の善悪の行為にたいしては、責任を負わなければなりません。

<以上抜粋>

## 2 日本の宗教観との違い

日本の人は、あまりなじみのない宗教であること、そして、日本の宗教では「一神教」という考え方があまりなじみがないので、この抜粋を長々としましたが、読んでいただいても違和感があつたかもしれません。

しかし、イスラム教の信者は、世界各国で 16 億人といわれ、キリスト教に並ぶ信者の数を誇っています。この考え方の方が、日本の宗教観よりも世界に受け入れられているということだけは間違いがないようです。もちろん、価値観や宗教観、そして死生観などは、育った環境や風土、生活習慣などによって異なるので、イスラム教が多いからといって、その考

え方に合わせなければならないというものでもありませんし、また、どちらが正しいというものでもありません。まずは、「自分たちの考え方や習慣はどうか」ということを考え、その次に「違い」を認識し、そして互いに相手を尊重することが最も重要なことであり、正しさを競うものでもなければ、相手を駆逐するものでもありません。また、どこの神も、これはキリスト教でも仏教でも、「ほかの神を駆逐せよ」というような協議は存在しません。まず、そこを間違えないようにしなければなりません。

そのうえで、日本人の宗教観はどのようなものでしょうか。

改めて、日本人の宗教観というと、自分のことですから、なかなか困ってしまうかもしれませんね。今回は、皆さん少しずつ違うかもしれませんが、日本人の一般的な宗教観をここで確認しておきましょう。

日本人は、基本的に多神教です。要するに自然現象全てに、いや、人間の中にも、また、病気などの中にもすべて「神」がいると考えています。自然現象で言えば、「風神雷神図屏風」などがあるように、風にも雷にも神がいると考えられています。また、道具など人間が作り出したものにも神が宿るとされています。ですから「物を粗末に扱ってはいけません」などと、小さいころに親に怒られた経験がある人も少なくないのではないのでしょうか。怒られたときの理由は「粗末にすると罰が当たる」というようなものではなかったでしょうか。これは、粗末にすることによって「その物に宿る神様から罰が当たる」ということを示しています。要するに、「神様」は、物にも宿るということを意味しているのです。

そもそも、古事記において冒頭部分では、「天地が初めて現れ動き始めた時に高天原に成った神の名は、天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）、次に高御産巢日神（タカミムスヒノカミ）、次に神産巢日神（カミムスヒノカミ）、この三柱の神は、みな独り神として、姿は見えません。」（天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神訓高下天、云阿麻。下效此、次高御産巢日神、次神産巢日神。此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。）とあります。また、地上が泡の様にできたときに「葦が芽を吹くように、きざし伸びるものによって成った神」（國稚如浮脂而久羅下那州多陀用幣流之時流字、如葦牙、因萌騰之物而成神）というように、新たに土地が生まれたり、あるいは国が生まれると、「葦の生えるように」自然に神が出てくるのです。

この自然に出てきた宇摩志阿斯訶備比古遲神（ウマシアシカビヒコヂノカミ）、天之常立神（アメノトコタチノカミ）を含め五柱の神を別天津神（コトアマツカミ）というようになります。

そして、ここから七代、神が直接治めることができます。そしてこの神々が伊邪那岐命と伊邪那美命に天の沼矛（アメノヌボコ）をお授け、「この漂っている国土を有るべき姿に整え固めなさい。」と命じるのです。

そして、二神はそのまま交わって子（国・島）を生み、国を整えた後、そのまま神を生むのです（既生國竟、更生神）。

さて、ここで皆さんお気づきになるのが、「同じ男女の神から、国（島）と、神を産み分

ける」ということが普通に書かれているのです。

日本の場合、「葦が芽を吹くように、きざし伸びるものによって成った神」のように、何もしないで自然に神が成立する場合がありますし、また、国に合わせて神が生まれる場合もあります。一方、神産み伝説は、伊邪那美命が火之迦具土神（ホノカグツチの神）を産み、火傷を負って病に伏せてしまい、そして死んでしまいます。伊邪那岐命は、「わたしの最愛の妻を一人の子に代えたのは残念だ」と仰せられて火之迦具土神を殺してしまいます。その殺した子供のさまざまな部分から神が生まれますし、また、泣いている涙からも神が生まれます。その後、黄泉の国に、伊邪那岐命は、伊邪那美命に会いにゆき、そして様々あって逃げて戻ってきてから、その目や鼻をすすいだ水から天照大御神。右目を洗った時に生まれた神の名は、月読命。鼻を洗った時に生まれた神の名は、たけはやすきのおのみこと建速須佐之男命が生まれます。

このように、神はさまざまところから生まれ、また成立するのです。そして、「神がない」ように思えるところでも、「神が生まれてくる」というような形になります。日本の宗教観では「八百万の神」（ヤオヨロズノカミ）ということを行います。日本の神社で祀られている神をすべて合わせても、八百万もの神はいないのですが、逆に、祀られていない神々も含めれば、かなり多くの神がいるということになります。

日本の習慣では「八」は縁起の良い数ということになっています。「八」という漢字は見ての通り、下に広がっているため「末広がり」と呼ばれ、人々に好まれます。また、アラビア数字の「8」は○が2つで角がなく、「物事円満に行く」というような言い方になることもあります。古代の日本においては、八は聖数とされ、また、漠然と数が大きいことを示すのにも使われました。陰の数なのですが、二つに分けることができる数で、最も大きな整数です。ものが多いというのは、「分けることができる」ということを意味し、そのために、大きいことを示すのはちょうど良かったようです。「八百万」のほかにも「八重桜」や「八十島」など、さまざまところで「多い」という意味で「八」が使われています。

また「八百」ということにも意味があります。「八百屋」や「嘘八百」のように「やお」にすでに「なんでも」という意味があるのです。そして「万事休す」のように、「よろづ」にすでに「あらゆること」という意味があること、それがあわさって、「やおよろづ」には「ありとあらゆる」普遍性と数の多さを示す意味があるのです。

ちなみに、古事記には「やそかみ八十神」というような書き方が出てきます。もちろん、「八百万の神」と同じ意味に使われています。

さて、このように日本には、さまざまな神が、自然と日本人の生活の中にあります。そのために、他の神を駆逐するとか、他の神を信じているから「邪教だ」などというようなことはありません。

1549年、イエズス会のフランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教をもたらした時に、多く的人是キリスト教を真剣に聞きました。ザビエルは日本人の印象について、「この国の人びとは今までに発見された国民の中で最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだでは見つけられないでしょう。彼らは親しみやすく、一般に善良で悪意がありま

せん。驚くほど名誉心の強い人びとで、他の何よりも名誉を重んじます。」(『聖フランシスコ・ザビエル全書簡 3』p96より)。

しかし、ザビエルは、徐々にそれが「キリスト教に帰依する」ということではないことに気づきます。ちょうどキリスト教の神「ゼウス」を、「大日」と訳してしまったために、「大日が」と教えると、多くの人が「大日如来」を想像してしまうというように、結局、どんなにキリスト教の教えを伝えても、すべて日本の神々か仏教の神々の中に、組み入れられてしまうのです。

ザビエルは、布教半ばで日本を離れてしまいます。日本における「多神教」の宗教観を改めるのはかなり難しかったのではないのでしょうか。

### 3 イスラム教、キリスト教と日本の宗教

世界の三大宗教ということが言われます。「キリスト教」「仏教」「イスラム教」です。この三大宗教とは、なぜ広まったのでしょうか。

「キリスト教」は、実は狩猟民族の宗教です。狩猟民族ですから必ず主張をしますし、その獲物に巡り合えるか、また獲物との戦いに勝つか負けるかということが、非常に大きな問題になります。それだけに、獲物との戦いは、まさに、獲物だけではなく壮大な自然との闘いというような形になります。そして、「迷える子羊」という言い方が、まさに、無抵抗で群れている象徴となり、神の前では弱いものであるという感覚があります。

一方「仏教」は、まさに農耕民族の宗教であるとされています。農耕民族は、太陽、水、土、種というように、さまざまな力を結集して、一年間丹念に育てることによって収穫を得ます。そのために、やはり日本と同じような「多神教」になり、同時に、神々と人間の距離が非常に近くなります。仏教は「悟りを開くこと」で「仏」になることができ、なおかつ、植物のように輪廻転生で生まれ変わるといような感覚を持っています。日本の「神道」は、古代のうちに仏教の概念が入ってきたために、「神仏習合」が行われ、日本の中に非常に強く神道と仏教を融合した考え方ができてくるようになったのです。日本も稲作文化になっていたので、当然に、その文化の中において、仏教と神道を合わせることも苦も無く出来たのではないのでしょうか。

これに対して「イスラム教」は、商業隊の宗教というような言い方をされます。そのために、一つでは、最も後発な宗教でありますし、また、後発であるゆえに、最も生活習慣に根差した内容になっています。商業隊が夜に襲われないように、常に太陽の位置を確認できるよう、一日5回の太陽神アッラーへの礼拝をします。また、さまざまな土地に行くために、盗賊などに襲われて街に帰ってこれなくなってしまう人もいます。そのために、一夫多妻制を認めるなど、かなり生活習慣や当時の文化に従ったものが戒律になっています。

しかし、一方で、当時の生活に根差したために、時代の流れに従った科学的な内容などを入れることが、困難になってしまいます。このことが最も大きな問題になります。原理主義

は、当時の生活をそのままにしようとします。そのために、西洋の文明や化学の発展を行った現代の生活を行うことそのものが、神の意志に反すると考えてしまいます。もちろん「原理主義」は、イスラム教だけではありません。仏教徒にもキリスト教徒にも原理主義は存在します。しかし、イスラム教は、その戒律が生活習慣に根差しているので、生活の中に「戒律違反」が出てきてしまうのです。

日本の宗教と違い、「神が一人しかいない」ために、神の命令は絶対的に従わなければならないもの、です。神の意志である戒律に違反すれば、当然自分たちが死んでしまうばかりか、自分の家族や自分たちの民族が神に見放されてしまうのです。そうならないように、神の意思に従うことが必要になってしまいます。

このように、過去の生活に根差した戒律を重視することによって、他の宗教に比べて現状の生活に対して乖離する場面が多くあります。

これに対して、日本の宗教は、イスラム教の感覚と違い、神々の内容であっても、それを一般の生活習慣に入れ込んでしまうということになります。先に例を挙げたような、「物を粗末にすると罰が当たる」という言い方を、普通に各家庭で行います。しかし、その叱り方をするのに対して、宗教とか戒律というようなものはありません。日本人ならば、本当なら神々の儀式や神の言葉であろうことが、いつの間にか、生活習慣になってしまっているということが、たくさんあることを知っているのではないのでしょうか。

戒律と、生活習慣という二つの場面が、日本の宗教観とイスラム教の宗教観で、まったく逆の方向に向かっています。それだけに、日本人とイスラム教では、まったく違いすぎるだけに対立もしないような状態になっているのではないのでしょうか。

そのように考えると、同じ宗教でも、かなり違うということ、そして、それが違うことによって優劣があるのではなく、その成立や、文化、生活習慣等によって異なるものであり、その異なるということをお互いに尊重しなければならないということが良くわかるのではないのでしょうか。